

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4191 号 2018.2.3 発行

発達障害の子「死ねば分かった？」 第5景・教育（6） 福井新聞 2018年2月3日



佐藤さん（仮名）の個別の支援計画シート。理解不足による指導内容や誤字に母親は不信感を募らせた

「家庭訪問で登校刺激を行う→お願いしていない」「就寝時間がなぜそうなったのか本人に確認させる→プレッシャーになります」...

「学習障害（LD）」がある佐藤駿さん（16）＝仮名、福井県内在住＝のために、保護者と教師らで作成する「個別の支援計画」には、母・美穂さん（45）＝同＝の意見が随所に記されている。

中学最後の計画にもかかわらず、特性が理解さ

れていないと感じた。誤字やコピー（文章の切り貼り）も散見され「真剣に考えてくれない」と美穂さんの不信感は消えなかった。

駿さんは字を書くことが苦手。一方で、駿さんが友だちとSNSでするやりとりは普通の若者と何ら変わらない。「書こうとすると『書くことだけ』に意識がいつてしまう」（美穂さん）。解決策として学校側に授業中のタブレット使用を求めてきたが実現しなかった。

「視力の弱い子が眼鏡をかけるみたいに、その子に応じてデジタル機器を使うのがどうしてダメなの」。母親として納得できない。文部科学省による発達障害の子どもに対する合理的配慮の例に「デジタル教材、ICT機器等の利用」が明記されているだけになおさらだ。

鯖江市の吉崎莉菜さん（13）は5年生になってすぐ、担任に「なんでそんなのが分からないの」と言われ、算数が嫌になった。唯一できた国語で漢字の止めやはねを細かく指摘されたことがこたえた。「（学校に）行きたくない」「嫌や、嫌や」と言うことが増え、全身にじんましんが出るようになった。

半年以上、市内外の皮膚科を回ったが治らなかった。一晩中、母・幸子さん（43）が体をかいてあげないといけなくなり、睡眠薬が必要になった。知人が「もしかしたら心に何かあるのかも」と心療内科を勧められ受診。「自閉スペクトラム症（ASD）」だった。

体の発したSOS。「悩んだけど義務教育にこだわるよりも命のほうが大事」（幸子さん）。6年生になって学校に行かなくなると、じんましんの発症は劇的に減った。

莉菜さんは勉強の代わりに、動物の絵を描くことに没頭した。描き始めて3カ月後の公募展で大賞受賞。審査した画家から「すごく才能がある」と手紙をもらった。作品をネットで公開すると外国人から「天才だね」とコメントが来た。スマートフォンケースとTシャツの商品化も決まった。幸子さんは「楽しくなってきたんでしょうね。学校で褒められることがなかったから」。莉菜さんは今、犬猫の殺処分ゼロを訴える絵本を描こうと、保健所の見学に行くほど行動的だ。

県教育委員会によると、発達障害などで通常学級に在籍しながら、必要に応じて個別指導を受ける「通級指導」対象の小中生は6万3497人のうち519人（2017年度）。

ほかにも小学校を中心に「気がかりな子」がいる。

ある教師は「苦手なことを頑張ってやり遂げたとき、褒めてあげるとすごく伸びる」こともあって発達障害の可能性を指摘できないことがあると打ち明ける。別の教師は保護者に診断を促すと「自分の子どもに障害の可能性があるとされた気持ちは分かるのか」と責められたという。

理解が不足したり、対応が遅れたりして苦しむ子ども。駿さんは卒業から半年以上たつてぼつりと漏らしたという。「僕、死ねば分かってもらえたのかな」

使い捨ての医療機器、リサイクルへ 医療費削減も期待 合田禄、阿部彰芳

朝日新聞 2018年2月3日

手術などで用いる使い捨て医療器材のリサイクルに向け、医療業界が動き始めた。昨年国が制度を作ったのを受けて、メーカーや滅菌業者が協議会を立ち上げ、普及に取り組む。新品なみの品質を持つ安価な中古品が広がれば、医療費削減につながる可能性がある。

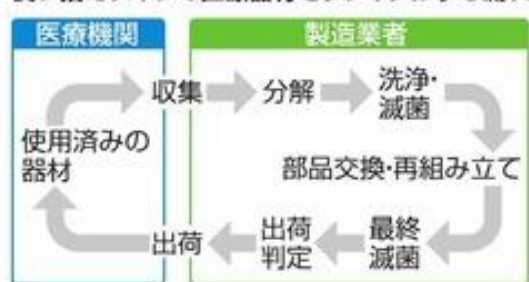


協議会は、米国の医療器材リサイクル大手の日本法人を含む9社で結成。東京で2日会見した松本謙

一理事長（サクラグローバルホールディング会長）は、「目的は医療製品の有効活用や安全管理。医療廃棄物の削減にもなる」と語った。会員企業は、早ければ今春にも製造販売のための承認を申請、2018年度中に第一号の販売を目指すという。

腫瘍（しゅよう）などを切除する電気メスの電極や、骨を切るのこぎりの刃などの器材は、メーカーが添付文書（説明書）で使用を1回限りと定めたものが少なくない。感染や機能の低下を防ぐためだが、あるタイプのカテーテル（細い管）は約20万円するものもある。

使い捨てタイプの医療器材をリサイクルする流れ



再使用が発覚した使い捨て器材の一例



障害児福祉サービス無償化 養父市、兵庫県内初

神戸新聞 2018年2月3日

兵庫県養父市は2018年度から、18歳未満の障害児を対象とした福祉サービスを実質無償化する方針を固めた。障害の有無にかかわらず、安心して子育てできる環境を整えるのが狙い。同市によると兵庫県内初の試みで、全国的にも珍しいという。（那谷享平）

無償化の対象となるのは、放課後デイサービスや未就学児への療育支援、居宅介護など、児童福祉法と障害者総合支援法で定めるサービス。現行制度では、所得などに応じて3万7200円を上限に、サービス料の原則1割を利用者が負担している。

養父市によると、市内で障害児の保護者が自己負担を気にしてサービスの利用をためらう事例があったといい、同市が無償化を検討してきた。利用者が負担額を支払った後、申請を受けた市が利用者の口座に振り込む形となる見込み。18年度は45人程度の利用者を想定。市議会3月定例会に提出する予定の18年度一般会計当初予算案に、関連費用約

200万円を計上する。

市は18年度予算案編成の柱の一つに、新たに「日本一福祉が充実したまち」を掲げ、障害者の支援強化などに乗り出す方針。国や県の補助事業として障害者向け施設の建設や増改築などを行う事業者に対し、市が補助を上乗せする事業も盛り込むという。

障害者スポーツ 「関心がある」57% 「観戦したい」は29% 都世論調査 /東京 毎日新聞 2018年2月3日

2020年東京五輪・パラリンピックを見据えた都の世論調査で、障害者スポーツに「関心がある」と答えた都民が約57%に達した。16年リオデジャネイロ・パラリンピック直後に行われた前回調査とほぼ同水準を維持しているが、実際に「競技を観戦したい」と答えたのは約29%にとどまり、競技会場へ足を向かわせることに課題がありそうだ。

競泳で東京パラ目指す 出口舞さんトレーニングに熱 東京新聞 2018年2月3日



メキシコで獲得したメダルを手に「1日平均5000メートルは泳ぐ」と話す出口舞さん＝横浜市で

川崎市川崎区の出口舞さん(21)が、競泳の知的障害クラスで二〇二〇年東京パラリンピック出場を目指し、練習に励んでいる。昨年の国際知的障害者スポーツ連盟(INAS)の世界大会では、百メートル平泳ぎで自己ベストを更新し三位に入賞。トレーニングにも一段と熱が入っている。(小形佳奈)

舞さんは二歳まで歩かず、三歳になってもあまり言葉が出なかった。三歳半で軽～中度の知的障害と診断された。両親は積極的に外に出てほしいと思い、水泳

やリトミック、空手教室、登山などを経験させた。唯一続いたのが水泳という。

横浜国立大の附属特別支援学校高等部二年のとき、全国障害者スポーツ大会に初出場。二十五メートルと五十メートルの自由形少年女子の部で優勝し、目標を東京パラに定めた。

現在は横浜市内の保育園で、保育補助をしながら練習。平日夕方は自宅近くのスイミングクラブで二時間弱、休日は同市の障害者スポーツ文化センター「横浜ラポール」などで



一～二時間泳ぐ。高校時代に陸上選手だった母忍さんと鶴見川沿いを走り、筋力トレーニングにも励む。

稗田コーチ(左)の指導を受ける舞さん

INASの世界大会は、日本代表として初の海外遠征となった。開催地のメキシコでは標高の高さに悩まされ、二日目まで調子が出なかったが、最終日に得意の平泳ぎで「絶対欲しかった」というメダルを獲得し、リレーでも優勝に貢献した。今年一月に千葉県内で行われた知的障害者選手権では、八百メートル自由形で二位だったが日本記録を更新した。

舞さんを指導する、障害者水泳スクール「宮前ドルフィン」の稗田律子コーチ(66)は「スタミナとキックの強さが持ち味の頑張り屋さん。海外での大会経験を積んで、精神面を強化してほしい」と話す。

日本知的障害者水泳連盟の谷口裕美子専務理事によると、東京パラの開催決定後、選手層が厚くなり記録も伸びているといい、代表選出には、さらなる努力が必要になりそうだ。舞さんは「まずは国際パラリンピック委員会(IPC)の標準記録を突破したい。そこに届けば、パラリンピック出場という夢が目標に変わる」と前を見据える。

障害者らのダンス集団 3月に海外公演も 竹之内直道 朝日新聞 2018年2月2日



公演に向けて熱のこもった練習をする「ウゴクカラダ」の団員ら=名古屋市北区 障害福祉サービスの認定NPO法人ポパイ（名古屋市北区）の事業



所に通う知的障害者らが中心のダンス集団「ウゴクカラダ」が8日、同市千種区のライブハウス「Tokuzo」で公演する。「立春願かけ祭」と題し、ダンスを披露するほか、ポパイ職員の音楽家山口光さんらのバンド演奏などもある。

今回の公演では、「ウゴクカラダ」のメンバー6人が新たな振り付けに挑戦したコンテンポラリーダンスを披露する。テーマは「CONFUSION INCLUSION」。直訳すると「混乱と包含」だ。

障害を抱える人とそうでない人など、生きてきた過程、文化が違えば、お互いに混乱が生じるのは当然。その混乱も違いも包み込む社会であって欲しい。団員たちはそんな思いを込め、約30分間、途切れることなく踊り続けるという。

福祉映画の先駆者、再評価の動き 柳沢寿男監督、障害者描く



東京新聞 2018年2月2日

障害者や難病患者と社会との関わりを丹念に問い続け、障害児施設に密着した「夜明け前の子どもたち」など先駆的な福祉ドキュメンタリー映画5部作を残した柳沢寿男監督(1916～99年)を再評価する動きが活発だ。東京・渋谷の映画館で3日から特集上映が始まり、業績と人物に光を当てた書籍も10日に出版される。

柳沢監督は40年、松竹京都の時代劇映画で監督デビュー。戦後は官庁や企業のPR映画、文化・教育映画を多数手掛け、60年代以降は自主制作で福祉の現場に密着した。

特集上映は「シネマヴェーラ渋谷」で16日まで。滋賀県の重症心身障害児療育施設の子どもたちや職員を描いた「夜明け前」や、盛岡市の農耕型福祉の試みを捉えた遺作「風とゆききし」のほか、富士山頂観測所、北九州の遠洋底引き漁船などを取材した短編記録映画を集めた。

「そっちやない、こっちや 映画監督・柳沢寿男の世界」の表紙

5部作の一本から題を採った新刊書「そっちやない、こっちや 映画監督・柳沢寿男の世界」(新宿書房)は、散逸していた監督自身の文章、評論家や研究者による論考、詳細な作品リストなどをまとめた。

共編著者で、柳沢作品の自主上映運動に長年携わってきた浦辻宏昌さん=奈良市=は「障

害者福祉の原点が忘れられ、相模原殺傷事件も起きてしまった今こそ監督の歩みを見つめ直したい」と話す。

＜あきた十文字映画祭＞国内外の話題作 12 本上映 ゲストにリリー・フランキーさんら



河北新報 2018年2月3日

リリー・フランキーさん(左)らが出演する「パーフェクト・レボリューション」((c) 2017「パーフェクト・レボリューション」製作委員会)

第27回あきた十文字映画祭(実行委員会主催)が10～12日、横手市十文字文化センターで開かれる。リリー・フランキーさん主演の「パーフェクト・レボリューション」(12日)をはじめ、国内外の話題作12本を上映する。監督や俳優らが舞台あいさつやゲストトーク、握手会などに参加して観客と交流する。

ゲストとして映画祭に来場予定のリリーさん

は、同作品で脳性まひにより車椅子で生活している身体障害者を熱演した。障害者への誤解を解こうと奔走する活動家の実話に基づく物語を通して、身体障害者を取り巻く性の実態を世に問い掛ける。

11日上映の「SHARING」(シェアリング、英語で共有の意味)は、東日本大震災の予知夢を見た人を調査する社会心理学者の葛藤がテーマの一つ。震災後の日本人に共通する心の問題に真正面から向き合った意欲作だ。

ベトナム映画「草原に黄色い花を見つける」(10日)、イタリア映画「ブランカとギター弾き」(11日)など国際色豊かな作品もプログラムに並べた。

ゲストにはリリーさんのほか、「パーフェクト・レボリューション」の松本准平監督、「SHARING」の篠崎誠監督らを予定している。

1作品券が1300円(会場での当日販売のみ)、指定日の全作品を鑑賞できる1日券は3000円(当日3800円)。連絡先は実行委事務局080(8182)3501。

◇上映スケジュール (内は監督名、敬称略)

- 【10日】午前10時35分「草原に黄色い花を見つける」(ビクター・ブー)▷午後1時「しゃぼん玉」(東伸児)▷同3時半「武曲 MUKOKU」(熊切和嘉)▷同6時「THE LIMIT OF SLEEPING BEAUTY」(二宮健)
- 【11日】午前10時半「ブランカとギター弾き」(長谷井宏紀)▷午後0時50分「世界でいちばん美しい村」(石川梵)▷同3時半「愛しのノラ～幸せのめぐり逢い～」(田尻裕司)▷同6時「SHARING」(篠崎誠)
- 【12日】午前10時「禅と骨」(中村高寛)▷午後1時「パーフェクト・レボリューション」(松本准平)▷同3時50分「幼な子われらに生まれ」(三島有紀子)▷同6時50分「AMY SAID エイミー・セッド」(村本大志)

家族の絆、映画で考えて 市民有志が上映会 三木 神戸新聞 2018年2月3日

兵庫県三木市などで命と向き合ってきた市民有志でつくる「ゆずり葉委員会」が、家族の絆を問うドキュメンタリー映画「ずっと、いっしょ。」を12日、市民活動センター(同市末広1)で上映する。代表の福祉作業所指導員米林幸峯さん(同市)は「大切な人がいてくれることが奇跡だと再確認できる映画」とアピールしている。(大島光貴)

米林さんは長女を未熟児で出産した際、新生児集中治療室(NICU)で毎日、小さな命が失われる様子を目にした経験を持つ。子育てが一段落したことから、夫を亡くした女性や、脳性まひの男児を育てる夫妻らと同委員会をつくり、最初の活動として映画上映を企画した。

累計70万人以上が鑑賞した豪田トモ監督の映画「うまれる」の第2弾。血のつながり

のない息子を育て、事実を伝えるべきか葛藤する父親▽4 2年連れ添った最愛の妻を失い、悲しみと向き合う夫▽1歳まで生きる確率が約10%という重い障害の子を育てる夫婦を描く。

映画「ずっと、いっしょ。」の上映会を企画した「ゆずり葉委員会」のスタッフら＝三木市志染町吉田、画廊喫茶とらうべん

スタッフの男性(50)＝同市志染町東自由が丘1＝は「3組とも応援したくなる家族で、ほのぼのとした気持ちになる。当たり前なのが幸せだと感じた」と話す。

午前10時と午後1時半開映。上映時間2時間2分。前売り千円(小中高生500円)、当日1200円(同600円)。画廊喫茶とらうべんTEL0794・85・4835



文化発信イベント、3200件を認証 東京五輪に向け 政府

政府は2日、2020年東京五輪・パラリンピックに向け、日本の魅力を国内外に発信するイベントとして認証を受けた「beyond2020プログラム」が約3200件に達したと発表した。

政府や自治体などは17年1月から、地域性豊かな日本文化を発信したり、障害者の社会参加を進めたりするイベントを認証する事業を開始。認証を受ければ、専用のロゴマークを使用でき、事業を広くPRすることができる。

これまでに、外国人や障害者を招待して相撲の魅力を伝える日本相撲協会のイベントや、演奏するホールをすべてバリアフリーとした川崎市のジャズイベントなどが認証を受けている。

分野別で見ると、「音楽」が570件と最多で、「伝統芸能・まつり」が443件、「美術」が296件などとなった。

開催地域で見ると、五輪の競技会場がある関東地方が最も多く、内閣官房の担当者は「今後は小さいイベントでも、地方に認証を広げていければ」と話していた。

希少がん 専門的診療受けられる病院のリスト公表 NHKニュース 2018年2月3日

がんの中でも患者数が少ないいわゆる「希少がん」について、国立がん研究センターは、専門的な診療が受けられる病院のリストの公表をホームページ上で始めました。

がんの中でも肉腫や脳腫瘍など、患者数が人口10万人当たり6人未満と極めて少ないものは希少がんと呼ばれていて、合わせて200近くありますが、専門的な診療を受けられる病院に限られるため、発見が遅れたり適切な診療を受けられなかったりするケースがあります。

このため、国立がん研究センターでは、希少がんの専門的な診療を受けられる病院のリストの公表をホームページ上で始めました。

はじめに対象としたのは、筋肉や脂肪などに腫瘍ができる「軟部肉腫」で、診断や治療ができる専門医が常勤であることや、過去3年間に毎年新たな患者を診療した実績があるといった条件を元に、31都道府県で53の病院のリストを掲載しています。

リストでは、病院ごとに、治療件数や専門医の数、それに受診してから本格的な治療を開始するまでに待たされる日数などを確認することができます。センターでは今後、ほかの希少がんについても順次、診療が受けられる病院のリストを公表することになっています。

希少がんセンターの川井章センター長は「患者だけでなく、医療機関が病院を紹介する際にも利用してもらいたい」と話しています。

栃木・日光に折り紙自販機 障害者手作り観光客に人気 産経新聞 2018年2月3日
自動販売機で買った折り紙作品を持つ観光客＝1日、栃木県日光市



栃木県日光市の日光東照宮近くに、折り紙作品を取り扱う自動販売機が登場した。作品は福



祉施設に通う障害者の手作り。観光客らが旅の思い出に買い求め、売れ行きも好調だ。設置した会社は「障害のある人にやりがいのある仕事をしてもらうモデルケースになれば」と意気込んでいる。自販機は宇都宮市のIT関連企業「アクシス」が昨年10月に設置した。「日光に折り紙の自販機を置くと面白そう」「障害者の就労支援に」。社員との雑談から生まれたアイデアを社長の和気悟志さん（41）が採用。「つるのはねプロジェクト」と銘打ち、日光市の就労支援事業所「すかい」の協力を得て実現した。鶴やかぶと、まりなどの5作品1組で200円。

スクールソーシャルワーカー、重責ずしり出番急増

佐賀新聞 2018年2月3日

佐賀県東部地区を担当するスクールソーシャルワーカーの手帳に書き込まれた支援のスケジュール。教育現場での認知度の高まりに伴い、支援要請も増えている



貧困や発達障害、いじめ、虐待など子どもを巡る問題の顕在化に伴って、佐賀県内でも出番が増えているスクールソーシャルワーカー（SSW）。学校に不信感を抱く保護者と信頼関係を築き、問題解決に結びつけるケースも見られるなど力を発揮しているが、休日や時間外にも相談者や関係機関から連絡を受けるなど、非常勤職ながら重責を担っている現状がある。

「不登校の問題でもいろいろな背景がある。貧困、発達障害、虐待が複雑に絡み合っているケースが少なくない」。県東部地区を担当するSSWの女性（45）は仕事の難しさを話す。

面談「夜が多い」

特に近年増えていると感じるのは貧困の問題。「修学旅行の負担金が払えない」「校納金や給食費が払えない」といった訴えを端緒に、子どもの困窮状況が明るみになる。「学校側の聞き取りだけだと、単に保護者が働いてない現象面に目を向けがちになる。SSWが入って聞き取ると、心の病だったり発達障害など働けない背景や要因まで明らかにできることが多い」という。こうした場合、就労や生活支援だけでなく、精神面のケアなど医療、福祉面のサポート態勢づくりにも駆け回ることになる。

いじめ問題では、保護者が学校側に不信感を募らせているケースが多い。丁寧に対応して信頼関係づくりに心を砕く。保護者との面談は「夜が多い」という。

土日や休日に連絡を受けるときもある。『「ひとり親世帯の保護者が急きょ入院し、子どもの世話ができる親族がいない。どうすればいいか』と学校から呼び出されたこともある』と女性。過去に支援した家庭で虐待が起き、児童相談所から一時保護の可否に関する相談もあったという。

パソコン支給なし

SSWは家庭の問題を把握し、的確な対策に結びつけるために細やかに聞き取り、関係機関と対応を検討する「ケース会議」を主導する役割を担う。「支援に必要な情報」の共有が重要だが、県教育委員会からパソコンの提供がないため、個人用での情報管理を余儀なくされているケースが少なくないという。

SSW向けにパソコンを配備している市教委もあるが「教育委員会事務局から持ち出して使うことができず、家庭や関係機関、学校を行き来する今の働き方では使いにくい」との声もある。あるSSWは「情報漏れがないよう細心の注意を払っているが、セキュリティー対策も含めて環境整備をしてほしい」と話す。

複数の市町を担当する別のSSWの女性（50）は1日の移動距離が70～80キロ、多い時には200キロに及ぶ。各市町での年間の勤務時間は決まっており、移動時間の長さが各市町での仕事に影響を及ぼすことになる。ある町では週4時間程度の割り当てしかなく、「相談対応や関係機関との協議のスケジュール調整が大変」と明かす。その上で「時間がかかるケースもあるので、それを踏まえた担当市町決めや配置時間の設定が必要」と指摘する。

「さらに人員を増やそうと考えるなら、働きやすい環境づくりをしないと確保は難しい」。どのSSWも労働環境改善の必要性を訴えている。

養護施設、大学卒まで支援 京都市、入所可や退所後も 京都新聞 2018年02月03日

京都市は2018年度、児童養護施設などの退所者が着実に自立するための支援態勢を新たに整える。退所後のケアを中心的に担う職員「自立支援コーディネーター」を各施設に配置し、仕事や家事など生活全般にわたる相談や助言を行う。現在の入所期限は高校を卒業する18歳までで、延長しても20歳までとなっているが、20～22歳の居住・生活費を補助し、大学卒業までの入所を可能にする。公的な支えが弱いとされてきた退所者への総合支援が一步動きだしそうだ。

児童養護施設の入所者は親がいなかったり、虐待された経験を持っていたりさまざまな事情を抱えており、退所後の生活でも困難な状況に直面するケースが多い。市が本年度初めて行った退所者の生活状況調査でも、「困り事」として経済面の不安をはじめ、仕事や親との関係、孤独、家事など多様な問題が挙がった。

自立支援コーディネーターは、市内に計8カ所ある児童養護施設と児童心理治療施設に1人ずつ配置する。市が各施設に非常勤事務職の給与分を支給することで、職員らの中から退所後のケアに専念できる職員を確保してもらう。

子どもが入所中の段階から進学や就職の相談、生活面の助言を行いつつ、退所後の支援計画を作成する。退所後も22歳まで継続的に電話や訪問を通じて支援する。市は同コーディネーターを定期的に集め、退所者の抱える課題に応じて専門家による研修も行う。

また入所中は国と共同で居住費や食費、光熱費などにあたる費用を施設に支払う。入所者が大学などに在学中の場合は、20歳を過ぎても月10万円程度の支払いを22歳まで続けることで、大学卒業まで施設で暮らせる態勢にする。

市は18年度当初予算案に、国の補助金を含めて関連事業費を盛り込む。市子ども家庭支援課は「退所してもさまざまな課題を抱える人が少しずつでも自立に向かうように支援したい」としている。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行